

性格特性からみた女性の独立意識 (2)

- 発達の観点から , 青年期後期と成人期前期の比較 -

三田英二

Women's Awareness of Independence Examined from Viewpoint of Personality Traits (2)

Eiji MITA

本研究は , 女性の自己形成過程を検討する一環として , 女性の独立意識を取り上げ , 性格特性を用い , 発達の観点から検討したものである。

調査対象者は , 青年期後期群として , 女子学生 90 名 (平均年齢 19.18 歳 , SD=.76 , range18-21)。成人期前期群として , 女性 73 名 (平均年齢 25.12 歳 , SD=1.96 , range22-29)。

測定用具として , 加藤・高木 (1980) の独立意識尺度と YG 性格検査を用いた。分析にあたっては三田 (2003) が因子分析した結果を用いた。

女性の独立意識の特徴として以下の 2 点考えられた。第 1 に , 性格特性に影響される独立意識から , 性格特性に影響されない独立意識へと変化していくこと。第 2 に , 消極的ながらも相互協調的な対人関係を保ちながら , その中で自律的な行動がとれることを目指すこと。

・問題

従来の自己形成理論は男性中心に構築されたという指摘は多い(山本,1988;桑原,1990;高橋・柏木,1995;三枚,1998)。また,女性の自己形成過程は複雑だとも指摘される(石谷,1994)。本研究は,従来の自己形成理論は馴染まないとも,また,その形成過程は複雑だとも指摘される女性の自己形成を検討する一環として行われている。

前研究(三田,2005a)では,青年期全般での女性の独立意識について性格特性(YG 性格検査を用いた)から検討を行った。本研究では,女性の独立意識を更に詳細に検討するため,発達の観点から女性の独立意識の形成過程を同様に性格特性を用い検討することを目的としている。

加藤・高木(1980)が作成した独立意識尺度を因子分析した三田(2003)の結果は,5因子が抽出され,概ね,親との関係を示す因子と同一性形成に関係する因子とに分かれた。このことは,従来から指摘されていることと一致する結果でもある。

親との関係を示す因子として,「親への依存」,「自信の欠如による親への服従(以下,「親への服従」と略記)」が挙げられ,同一性形成を示す因子は,「自己決断力」,「時間的展望の拡散(以下,「展望拡散」と略記)」,「反抗期心理」である。

依存から自立を目指す従来の心理発達過程から考えれば,「自己決断力」因子は,社会適応の良好さを示す性格特性がその予測因となり,「親への依存」因子や「親への服従」因子は,不適応状態を示す性格特性がその予測因になるものと考えられる。

しかし,前研究(三田,2005a)の結果は,目的変数「親への服従」因子では,内的不適応状態を示す性格特性がその予測因となっているものの,目的変数「親への依存」因子では,必ずしも不適応状態を示す性格特性がその予測因となっているわけではなかった。

この目的変数「親への服従」因子では,説明変数「神経質(N)」因子が正の予測因となり,説明変数「のんき(R)」因子が負の予測因となった。特に説明変数「のんき(R)」因子は,目的変数「親への依存」因子では10%水準の有意傾向ではあるが正の予測因であるのに対し,この目的変数「親への服従」因子では5%水準の負の予測因となった。同様に,説明変数「非協調的(Co)」因子は,目的変数「親への依存」因子では負の予測因となっているが,「親への服従」因子では有意な説明変数とはならなかった。

同一性関連の因子では,目的変数「自己決断力」因子において,目的変数「親への依存」因子の負の予測因ともなっている説明変数「非協調的(Co)」因子が同様に負の予測因となった。その他,目的変数「自己決断力」因子の予測因となった説明変数は,「攻撃的(Ag)」因子が正の予測因となり,「劣等感大(I)」因子と「思考的外向(T)」因子が負の予測因となった。

ある意味,親に依存することと協調性が因果関係を持つことは理解しやすいし,自己決断も劣等感の低さと攻撃性の高さとだけが因果関係を持つのであれば理解しやすい。しかし,自己決断力と協調性との間に因果関係があることは,従来の理論から考えれば矛盾する結果である。これは,親との協調関係を保ちながら自己決断を図るという心理的自立を目指すことを示していると考えられる。男性との比較を行っていないため,女性特有の独立意識のあり方と断言できないが,他者から分離した形で自律的に自立を目指す独立意識ではないことは想像できる。相互協調的な対人関係を維持しながらも自律的な行動がとれるようになることを目指した独立意識ではないだろうか。説明変数「思考的外向(T)」

因子が負の予測因となっていることもあり，相互協調的な故に，かなり熟慮した上で自己決断をするという，ある意味，単純ではない複雑な独立意識があるように思われる。

目的変数「展望拡散」因子では，内的不適応状態で冷静さがあると将来への不安が高まるという従来の指摘と一致する結果が得られている。しかし，目的変数「反抗期心理」因子の予測因となった性格特性からは，気分が沈んでいるときに衝動的に攻撃性を発揮したいということが原因となり「反抗的な態度」をとるという，自立への渴望といった従来の知見からかけ離れた性格特性であった。ただ，このことは，親との依存関係があるためになされることなのかもしれないし，他者との関係を重視しながら自己決断するため，他者への配慮がストレスとして感じられたときに起こる現象なのかもしれない。

本研究のデータはすでに相関分析により検討されている（三田，2004a）。青年期後期と成人期前期での大きな違いは，「親への依存」因子に見られている。すなわち，YG 検査の下位因子との相関のパターンが青年期後期群と成人期前期群で異なった。「親への依存」因子は，青年期後期群では「非協調的（Co）」因子でのみ有意な負の相関関係が見られただけであった。しかし，成人期前期群では情緒不安定を示す YG 検査の下位因子と正の相関関係を示した。更に注目すべきは，「親への依存」因子は，「非協調的（Co）」因子との間に青年期後期群では負の相関関係を示したのに対し，成人期前期群では正の相関関係（有意傾向）を示したことであった。成人期前期群での親への依存は，情緒不安定さと何らかの関連を持っている。しかしそこには，親とあまり協調関係を持ちたくないという性格特性とも関連している。

渡邊（1995）は，「これまでの発達心理学では他者への「依存（dependence）から独立（independence）へ」という西欧で発展してきた公式のもとに，依存は抑圧・禁止されるべき否定的概念として扱われてきた。それは，独立が社会的にも個人的にも理想であり具現すべき価値を持つ西欧文化のもとでは，依存は子どもの未成熟さやおとなの不健全さの現れと見なされてきたからである。」（p.89）と述べている。

渡邊（1995）の指摘は，「西欧的な公式」は日本に馴染まないという指摘だが，しかし，三田（2005a）の結果は，日本の女性においても「西欧的な公式」が部分的には当てはまることを示している。

青年期後期群では，「親への依存」因子は，「非協調的（Co）」因子と有意な負の相関関係を示ただけであった。ある意味，親に対する依存は，ア・プリオリ（a priori）的な自然な形の行動原理として内在化されており，当たり前のことと認識している結果と思われる。すなわち，親への依存心と情緒的不安定とは関係せず，不健全とは認識されていないことを示している。

青年期後期段階では，このように「西欧的な公式」には当てはまっていない。しかし，成人期前期群では情緒不安定を示す YG 検査の下位因子と正の相関関係を示している。成人期前期段階での依存性は，自己の未熟さとして認識され，他者の成熟度と比べたときに自己が劣っているという感情が呼び起こされ，自己嫌悪に陥った結果，情緒不安定さを示す性格特性と関連したと考えられた。逆に考えてみると，情緒不安定だからこそ，親とはあまり協調関係を持ちたくないが，親に依存することで心理的な安定を回復させようとしているとも考えられる。成人期前期段階では，自己肯定感と親への依存との間に有意な正の相関関係があることも確認されている（三田，2004b）。成人期前期段階では，親に対し

て依存したいのか否かよく分からない側面もある。

青年期後期群では親に依存することは協調関係を結ぶことであるが、成人期前期では、親から距離を置き心理的自立を図ろうとするためか、非協調的になっている側面も認められる。この点だけについて言及すれば、従来の「西欧型」の相互独立的な心理的自立の過程でもある（年齢段階はずれているが・・・）。しかし、前述のように成人期前期段階での親子関係は不明な点がある。

児童期には“重要な他者”であったはずの親との関係がどのように質的な心理的变化があるのか、また、女性にとっての自立のあり方とはどのようなものか、どのような内的準拠から独立意識が形成されていくのか、そして、女性の自己形成は相互独立的な自己形成を目指すのか、相互協調的な自己形成を目指すのか、という点を考える上でも、青年期後期から成人期前期にかけての親との関係の発達的变化を検討することは重要と思われる。

女性の独立意識については、上述のように不明な点が多くある。単なる相関関係ではなく、どのような内的準拠から、すなわち、どのような因果関係があるのかという観点から更なる検討を加える必要がある。

内的準拠となる性格特性を説明変数とすることで、女性の独立意識がどのような発達過程を歩みながら形成されていくのかを検討することが本研究の目的である。

．方法

1．調査対象者

調査対象者は、青年期後期群として、女子学生 90 名（平均年齢 19.18 歳，SD=.76，range18-21）。成人期前期群として、女性 73 名（平均年齢 25.12 歳，SD=1.96，range22-29）。

青年期後期群は、授業中に調査用紙を配布・回収し、成人期前期群は、郵送により配布・回収した（回収率 60 %）。

なお、青年期後期群・成人期前期群の両調査対象者について、プライバシー保護の観点から婚姻の有無の調査はしなかった。

2．用具

（1）独立意識の測定

加藤・高木（1980）の独立意識尺度を用いた。分析にあたっては三田（2003）が因子分析した結果を用いる。第 1 因子「自己決断力」（項目 4，5，6，7，8，9，10，35，36），第 2 因子「親への依存」（項目 20，21，22，23，24，25，27，33），第 3 因子「展望拡散」（項目 3，13，14），第 4 因子「反抗期心理」（項目 28，30，31，37），第 5 因子「親への服従」（項目 17，18，26，29，34）の 5 因子が抽出されている。

各因子の内的整合性係数（ α ）も検討されている。第 1 因子.850，第 2 因子.876，第 3 因子.809，第 4 因子.619，第 5 因子.680 と第 3 因子まで良好な値を示している。

（2）性格特性の測定

市販されている YG 性格検査を用いた。

・結果

三田(2003)が行った独立意識尺度の因子分析で抽出されている5因子を目的変数とし、YG性格検査の12の下位因子を説明変数として、青年期後期群・成人期前期群別々に重回帰分析を行った。重回帰式で得られた標準偏回帰係数を重相関係数、決定係数とともに青年期後期群をTable 1に、成人期前期群をTable 2示す。

この結果、青年期後期群(Table 1)では、目的変数「親への依存」因子と「反抗期心理」因子で重相関係数が有意ではなかった。成人期前期群(Table 2)においても目的変数「親への依存」因子で重相関係数が有意ではなかった。

有意な重相関係数を示した目的変数で、標準偏回帰係数が有意であったものは以下のとおりである。

青年期後期群においては、目的変数「自己決断力」因子で、説明変数「劣等感大(I)」因子($t=-2.97, p<.005$)、「非協調的(Co)」因子($t=-3.01, p<.005$)、「思考的外向(T)」因子($t=-2.78, p<.01$)であった。目的変数「展望拡散」因子では、「抑うつ性大(D)」因子($t=2.65, p<.05$)、「神経質(N)」因子($t=2.04, p<.05$)、「主観的(O)」因子($t=-4.05, p<.001$)、目的変数「親への服従」因子では、「神経質(N)」因子($t=2.23, p<.05$)、「主観的(O)」因子($t=2.04, p<.05$)、「攻撃的(Ag)」因子($t=-2.76, p<.01$)に見られた。

Table 1 重回帰分析結果(青年期後期群)

	自己決断力	親への依存	展望拡散	反抗期心理	親への服従
D抑うつ性大	-.028		.440*		-.157
C気分変化大	-.070		.098		.263
I劣等感大	-.446***		-.151		-.037
N神経質	-.078		.330*		.395*
O主観的	.005		-.503****		.278*
Co非協調的	-.328***		.033		.062
Ag攻撃的	.248*		-.036		-.337**
G活動的	.219		-.031		.277
Rのんき	-.009		.004		-.219
T思考的外向	-.363**		.121		.270
A支配性大	-.246		-.238		.012
S社会的外向	.064		-.131		-.047
重相関係数	.735****	.434	.661****	.485	.570****
決定係数	.540	.188	.437	.235	.324

*…5%水準 **…1%水準 ***…0.5%水準 ****…0.1%水準で有意

成人期前期群で標準偏回帰係数が有意であったものは、目的変数「自己決断力」因子で、説明変数「劣等感大(I)」因子($t=-3.05, p<.005$)。目的変数「展望拡散」因子では、有意な標準偏回帰係数は見られなかった。目的変数「反抗期心理」因子では、「攻撃性(Ag)」因子($t=2.61, p<.05$)。目的変数「親への服従」因子では、「のんき(R)」因子($t=-2.05, p<.05$)で見られた。

なお、青年期後期群と成人期前期群の独立意識尺度での各因子における平均得点の比較(t検定)は、三田(2003)で行っている。参考のため結果を示す。

独立意識尺度で有意差が見られた因子は、「自己決断力」因子（青年期後期群＜成人期前期群）、「反抗期心理」因子（青年期後期群＞成人期前期群）で、また、有意傾向が見られたものは、「時間的展望の拡散」因子（青年期後期群＞成人期前期群）であった。「親への依存」因子・「親への服従」因子では、青年期後期群・成人期前期群間で有意差は見られなかった。

Table 2 重回帰分析結果（成人期前期群）

	自己決断力	親への依存	展望拡散	反抗期心理	親への服従
D抑うつ性大	.342		.268	-.060	.073
C気分変化大	-.110		-.214	-.143	-.028
I 劣等感大	-.573***		.354	.069	.371
N 神経質	.004		.188	.102	.209
O 主観的	-.113		.048	.100	-.232
Co 非協調的	-.053		.017	-.262	-.123
Ag 攻撃的	.091		.169	.398*	.112
G 活動的	.095		.029	-.274	-.043
R のんき	.115		-.299	.245	-.352*
T 思考的外向	-.182		.238	-.081	.043
A 支配性大	.140		.030	.039	.111
S 社会的外向	-.080		-.041	-.211	-.114
重相関係数	.686****	.434	.615***	.555*	.582*
決定係数	.487	.188	.378	.308	.339

*…5%水準 **…1%水準 ***…0.5%水準 ****…0.1%水準で有意

・考察

独立意識尺度において青年期後期群と成人期前期群と比較を行った三田（2003）の結果からは、青年期後期から成人期前期にかけての発達の特徴として、自己決断力（「自己決断力」因子）が増していくこと、将来に向けた不安（「時間的展望の拡散」因子）が低くなっていくこと、反抗期的心理状態（「反抗期心理」因子）が収束していくこと、「親への依存」因子・「親への服従」因子において、青年期後期群と成人期前期群で得点上差異が見られず、親子関係に表面上差異は見られないものと考えられた。

以上のような前提に立ち、各因子ごと考察していく。

1. 「自己決断力」

三田（2004a）の相関分析では、青年期後期群・成人期前期群ともに YG 検査のプロファイル判定基準の D 型を示す相関関係を示した。自己決断力の有無が情緒的安定や社会的適応に関係することを示している。逆に、自己決断力が低いことと情緒的に不安定となり消極的なることとも関係があることを示している。このようなことは、発達段階の差異に関係なく、情緒的安定や社会的適応と自己決断力は強い関係があることを示している。発達的に「自己決断力」因子得点は上がっている。青年期後期よりも、成人期前期の方が自己決断力が高いことを示している（三田，2003）。

本研究の結果から、「自己決断力」因子の予測因となる性格特性が、青年期後期群では、正の予測因として説明変数「攻撃性 (Ag)」因子 (自己決断力の高さは攻撃性、社会的活動性の高さに起因している)、負の予測因として説明変数「劣等感大 (I)」因子 (自己決断力の高さは劣等感が低いことに起因している)、同様に負の予測因として説明変数「非協調的 (Co)」因子 (自己決断力の高さは協調的なことに起因している)、同じく負の予測因として説明変数「思考的外向 (T)」因子 (自己決断力は熟慮することに起因する) の4因子であった。

同様に、成人期前期群では、負の予測因として説明変数「劣等感大」因子 (劣等感が低いことが自己決断力の高さの予測因となる) だけであった。発達段階に関係なく自己決断力は適応状態と関連するが、発達段階の違い、または自己決断力の強さによって、内的準拠となる性格特性には違いがあることが示された。

青年期後期群では、「劣等感を感じる場面でなく、周囲の他者と協調的な関係にあり、活動性も高まっているが、ただ、じっくりと考えてから自己決断を行う。」と考えられる。つまり、青年期後期では、自己決断するときには多くの要因が重なり合い、自分のことだが対人関係を重視して自己決断を行うことを示している。このことは、青年期後期段階での自己認知の様式の特徴 - 社交場面や対人場面などの自己の外面的側面を重視する - (三田, 2003) とも符合する結果と考えられる。青年期後期段階で自己の外面的側面を重視することについて三田 (2004b) は次のように考えている。「青年期後期における女性の自己形成は、相対的に自己を把握することで、「外面 - 内面」の軸よりも「肯定 - 否定」の軸から分化が始まると推測される。そして、自己の否定的側面の受容・確立を目指し、歩み始めると考えられる。このため、青年期を通し、自己の否定的側面が自己形成に重要な役割を果たすことになる。しかし、何故「重要である」のかと考えたとき、自己の外面的で否定的な側面は内的準拠ではなく、自己の内面的な未熟さを覆い隠すための“壁”としての機能を担っているから「重要である」のではないかと思われる。真の内的準拠は“壁”の中にこそあり、“壁”は、自己に対する否定的な評価を他者から受けたときに、それが自己意識全体に影響し、直線的な自己否定へとつながらないように緩衝装置 (buffer) としての役割を演じるため「重要である」と回答し、… “壁”の中の自己が成熟するまで、自己の未熟さを覆い隠す“壁”としての役割は終わらない…」(p.50)。つまり、他者から「後ろ指をさされないように」することを配慮するため、「劣等感を感じる場面でなく、周囲の他者と協調的な関係にあり、活動性が高まっているが、ただ、じっくりと考えてから自己決断を行う。」と考えられる。

しかし、自己決断力が高まる成人期前期段階になると比較的スムーズに自己決断に至っている。成人期前期群では、自己決断力に影響を与えるのは、「劣等感がないとき」だけとなる。すなわち、自信に満ちているいるからこそ自己決断できる、ということになる。他者に対する配慮をしなくとも、自分自身の言動で、他者から非難・注意を受けて自分自身を傷つけることがなくなる、あるいは、他者から非難・注意を受けても、直線的に自己意識全体に影響を与えなくなり、自尊心を傷つけないレベルの精神構造に達した結果、劣等感がないというときに自己決断を行うのではないだろうか。「自負心」¹ について検討した結果 (三田, 2001) でも、青年期後期段階では、YG 検査の 12 の下位因子中 9 因子との有意な相関が見られたが、成人期前期段階では 2 因子 (「攻撃的 (Ag)」と「活動的

(G)」,ともに正の相関)と有意な相関が見られたただけであった。この場合も Self-Esteem 得点で, 青年期後期群<成人期前期群の有意差が見られている。心理的な成熟は, 変動すると考えられる性格特性から, 徐々に影響を受けなくなることを示している結果とも考えられる。

2. 「親への依存」

「親への依存」因子の得点比較を行った三田(2003)の結果では, 青年期後期群・成人期前期群間に得点上差異はなかった。親子関係は表面上変化がないことを示している。しかし, 三田(2004a)の相関分析の結果では, 前述のように, 青年期後期群と成人期前期群で大きく異なる相関関係を示した。すなわち, 青年期後期群では「非協調的(Co)」因子でのみ有意な負の相関が見られたただけであったが, 成人期前期群では情緒不安定を示す YG 検査の下位因子とも正の相関関係を示した。また, 「非協調的(Co)」因子で青年期後期群では負の相関関係を示したのに対し, 成人期前期群では正の相関関係(有意傾向)を示した。因果関係から検討を行っている本研究の結果では, 青年期後期群・成人期前期群ともに重相関係数が有意とはならず, 女性の親への依存は, 性格特性からは説明できなかった。

平均得点上有意差はない(三田, 2003)が, 異なる相関関係示す依存性を巡る女性の親子関係について更なる検討が必要なことを明示する結果と考える。

ただ, 成人期前期群の相関分析(三田, 2004a)での結果は, 心理的自立を図るために親への依存が不健全と認識しているとも, 情緒不安定だから親に依存することで心理的安定感を取り戻そうとしているとも, どちらにも解釈できる結果と現在では考えている。アンビバレントな心理状態にあるのではないだろうか。

3. 「時間的展望の拡散」

相関分析(三田, 2004a)においては, 青年期後期群・成人期前期群ともに「自己決断力」因子と逆のパターンを示した。すなわち, YG 検査のプロフィール判定基準の E 型を示す相関関係である。このことは, 発達段階に関係なく, 将来に対する見通しがないことによる不安は, 消極さや情緒的な不安定さと関連していることを意味している。

しかし, 本研究においては, 青年期後期群では, 説明変数「神経質(N)」因子が正の予測因(時間的展望の拡散は神経質さに起因する), 「主観的(O)」因子が負の予測因(時間的展望の拡散は客観的になることに起因する)となっている。成人期前期群では, 有意な予測因となる説明変数はなかった。

前述のように, 平均得点では, 青年期後期群>成人期前期群(有意傾向)となっており, 将来に向けた不安は, 発達の低下していくことを示している(三田, 2003)。また, 前述のように発達段階とは無関係に, 時間的展望の拡散と情緒的に不安定で消極的になることには関連性がある。

青年期後期段階では, 性格特性と因果関係を持ち, 将来に対する展望が拡散してしまうのは, 神経質さに冷静さ(客観的)が加わったときということになる。将来展望が開けてくると(成人期前期), 性格特性から影響を受けなくなる。自己決断力が向上した結果, 情緒的安定や社会的適応状態が良好になっていくこととも関連する結果と考えられる。こ

のため、性格特性と有意な因果関係がみられなくなったものと思われる。拡散してしまう場合は、別の要因によってなされるようになる。しかしその場合は、成人期前期段階でも、結果的に、消極的で情緒不安定になっていることを示している。

4. 「反抗期心理」

相関分析（三田，2004a）では、青年期後期群と成人期前期群では多少異なる結果を示した。青年期後期群の反抗期心理は、気分の変化が大きく（「気分の変化大（C）」因子）、「攻撃的（Ag）」な心理状態と関連をもった。しかし、成人期前期段階では、衝動的（「のんき（R）」因子）で「攻撃的（Ag）」な心理状態との関連性が示された。いずれにしても、従来から指摘されている、第2反抗期の様相とは異なるものであった。反抗期心理の本来の意味が消失している結果かもしれない（ただ、従来の自己形成理論は男性中心に構築されたと指摘される。このため、女性の本来の反抗期ということについては不明な点が多いはずである。）。

本研究の結果からは、青年期後期段階では、重相関係数が有意とはならず、性格特性との因果関係は認められなかった。前述の「反抗期心理の本来の意味が消失している…」ということと関連があるのかもしれないし、「親への依存」で重相関係数が有意ではないことにも関連し、青年期後期（従来の発達段階では青年期中期段階と思われるが…）段階における「依存と反抗」の現代的な意味の更なる検討を必要としていることを示唆していると思われる。本研究では、このことに言及するだけのデータはないため、今後の課題と考えたい。

重相関係数が有意であった成人期前期群では、説明変数「攻撃的（Ag）」因子だけが有意な予測因となった。更に、5%の有意水準には届かなかったが、説明変数「非協調的（Co）」因子と「活動的（G）」因子が10%水準の有意傾向（ともに負の予測因である）を示している。この2つの説明変数がともに正の予測因となっていれば理解しやすい。活動的で、非協調的で、攻撃的だから「反抗」と解釈できる。しかし、本研究が示した結果からは、単に攻撃的な反抗というわけではなく、活動性の低下と協調性を伴う反抗ということも考慮しなければならない結果である。

目的変数「反抗期心理」の平均得点は、青年期後期群 > 成人期前期群と有意差がある。すなわち、変質した「反抗期心理」かもしれないが、発達の収束していることを示している（三田，2003）。前述した「青年期後期段階は従来の発達段階から考えれば青年期中期段階」と同様に、青年期が延長し、成人期前期段階が従来の心理発達段階で示される「青年期後期段階」の心理構造にあるとすれば、「おとな」に対する「甘え」の現れなのかもしれない。すなわち、活動力が低下しているため、第三者に対して自己顕示欲を誇示するだけの活力はない。しかし、活力が低下しているからこそ自己顕示欲を満たしたい。結果として、身近な故に対人関係を壊さない程度（協調性）に、最も身近な「おとな」に対する自己顕示欲の発揮が「反抗」という形で現れる。このため、「おとな」に対して「甘えてみる」といった印象を持つ。

青年期後期段階での「反抗期心理」は、性格特性とは別の要因が原因となっているのか、あるいは、目的変数「親への依存」と同様ア・プリアリの行動として、親・教師に反抗的な態度をとるが、成人期前期段階では、活動性が低下したときに自己顕示欲を映す鏡と

して「おとな」を利用しているのではないだろうか。意識的な行動となるため、「協調性」を壊さない程度の「攻撃性」の発露という形になっているのではないだろうか。

5. 「自信の欠如による親への服従」

相関分析（三田，2004a）では、「時間的展望の拡散」因子と類似するパターンを示している。親に服従することは，青年期後期群では，情緒の不安定さだけと関連を持つが，成人期前期群では，情緒不安定なときだけでなく社会性が低下している状態とも関連している。

本研究の結果からは，青年期後期群では，説明変数「神経質（N）」因子が正の予測因（親に服従するのは神経質さに起因する），「主観的（O）」因子も正の予測因（親に服従するのは主観性に起因する），「攻撃的（Ag）」因子が負の予測因（親に服従するのは攻撃性や社会的活動性の低下に起因する）の3つの説明変数が有意な予測因となった。これに対し，成人期前期群では，説明変数「のんき（R）」因子だけが負の予測因（親に服従するのは熟慮的なことに起因する）であった。

青年期後期段階での目的変数「展望拡散」因子では，この目的変数「親への服従」因子と同様な説明変数が有意な予測因となっている。しかし，説明変数「神経質（N）」因子はともに正の予測因であるのに対し，説明変数「主観的（O）」因子は，この目的変数「親への服従」因子では正の予測因となり，目的変数「展望拡散」因子では負の予測因となっている。客観的なときには，自分の将来に対する不安が喚起され，主観的になっているとき（更に攻撃性が低下しているとき）には，親に従うということになる，ということも指摘しておきたいと思う。

青年期後期段階では，活力が低下し，神経質になり，自分一人の考えや感じ方に偏ってしまったとき（主観的），いわば自家撞着状態に陥り，自分では決めかねる状態になったとき，親に服従するということが推測される（すなわち，心理的に弱ってしまったときに思わず親に従ってしまうのではないだろうか）。

成人期前期段階では，熟慮した結果，自分では決めかねる状態が原因となり，親の意見に従うということが推測される。いわば，必要とするときだけ，親の意見に従っている状況だと推測される。このことは，相関分析（三田，2004a）で成人期前期段階の親への依存と非協調的態度に有意な正の相関関係（できることなら親には依存したくない）があることも符合する。

・ 総括的討論

青年期後期から成人期前期にかけて，内的準拠性となる性格特性からみた独立意識の形成過程は，概して，ア・プリアリの行動原理が入れ替わっていく過程と考えられた。すなわち，青年期後期段階では，自分の行動が「依存的」とか「反抗的」な行動ということが意識されず，ア・プリアリの行動として振る舞う。しかし，成人期前期段階になると，そのような「当たり前」と思っていた行動が「当たり前」の行動とは思わなくなり，「依存的」とか「反抗的」な行動というように認識されるようになっていく。これと入れ替わ

るように、独立意識がア・プリアリ的な行動原理として内在化され、定着していく。

このような観点に基づき、全体的に女性の独立意識の特徴として2点指摘しておきたい。

第1点目としては、上述の補足的な説明となる。すなわち、性格特性に影響される独立意識から、性格特性に影響されない独立意識へと変化していくこと。

性格とは、社会適応を考える上での重要な概念であり、「一般に人の行動の背後にあって、特徴的な行動の仕方、考え方を生み出し続けている態度の総体」(教育心理学新辞典第8版、金子書房、1978)と定義される。いわば、現実場面でのどのような行動をとるかということは、個人の性格特性がどのような状態にあるかに準拠する。独立意識と性格特性との間に相関関係や因果関係がある場合は、現実場面での行動と独立意識が関連を持ち、独立意識も現実場面での行動に反映されることになるが、ない場合は、現実場面での行動をとるときに、その都度、独立意識を意識しなくても済むようになることを示している。青年期後期段階から成人期前期段階にかけて、女性の独立意識は性格特性に影響を受けなくなり、内在化されていく過程が本研究では確認された。独立意識は、徐々にア・プリアリ的なものとなって、現実場面を意識されなくなっていく。

第2点目として、消極的ながらも相互協調的な対人関係を保ちながら、その中で自律的な行動がとれることを目指し、独立意識を形成していく。

すなわち、日本女性の独立意識形成過程は「西欧的な公式」には当てはまらない。ただ、これは文化心理学で指摘される日本人の自己形成の様式と類似するものでもある。しかし、本来の意味での「相互協調的」とは多少異なっているものと考えて、「消極的」と付してある。この点について、現時点で感じていることは以下のようなことである。

青年期後期段階での「相互協調的」な対人関係は、他者から非難されたり注意を受けないように対人関係に配慮するといった側面が見受けられる。

一方で、成人期前期群での目的変数「親への依存」因子では、重相関係数が有意水準には達せず、青年期後期段階同様、成人期前期段階でも親に依存することは、ア・プリアリ的な行動原理となっていることを示すものかもしれない。同様に、目的変数「反抗期心理」因子の有意な予測因は、相互協調的な対人関係を維持するためとも考えられる。また、親への依存と自己肯定感は有意な正の相関関係があり(三田, 2004b)、情緒不安定なときには親に依存することで心理的安定感を回復させようとする(三田, 2004a)側面も認められる。このように、成人期前期段階においても相互協調的な自己形成過程が色濃く残っている。

人には自尊心や自己評価を維持したいという基本的な欲求があると考えられている(Epstein, S., 1973; Tesser, A., 1984)。青年期後期段階での相互協調的態度は、自尊心や自己評価を低下させないための方略と思われる。成人期前期段階に至ると、自己意識の分化が進み、他者からの非難・注意を受けても「それはそれ、これはこれ」と非難・注意を受けた自己の側面とそれ以外の自己の側面を区別して考えることができるようになる。このため、自己のある側面に対する非難・注意が原因となって、全体的な自尊心や自己評価の低下を招くこともなくなる。このことは、自己決断力が高まること(三田, 2003)や、目的変数「自己決断力」因子の有意な予測因となったのが、説明変数「劣等感大(I)」因子だけであったことなどからも伺える。青年期後期段階とは異なり、自己決断を図るときに他者への配慮をしなくなっている、すなわち、発達的に自律的になっている。相関分析(三田,

2004a)においては、成人期前期段階で「親への依存」因子と情緒的不安定さを示す YG 下位尺度と有意な正の相関関係があった。親への依存を不健全と認識している側面も認められる。これも、自律的な行動を目指している結果と思われる。

特徴的なことは、自己の肯定的側面を有効利用するのではなく、自己の否定的な側面をいかに受容するか、ということが発達過程の重要な側面になっていることであろう。自己の否定的側面を受容できれば、その側面について他者から非難されたり、注意を受けても動揺しなくなる。肯定的な側面を利用するのではなく、否定的な側面をいかに解消していくか、ということの方が重要視されているため、“消極的”ながらも相互協調的な対人関係を保ちながら、その中で自律的な行動がとれることを目指す、と考えている。

ただ、本研究は、生物学的な性差に基づいた調査である。上述のことが日本女性の独立意識の特徴と考えるのは拙速だとも考えている。今後は、男性との比較や社会的な性差も考慮して検討を行っていく必要があると思う。

本研究の結果からは、女性の自己意識や独立意識の形成過程は、「相互協調的」な対人関係の中で、否定的な自己の側面を解消していくことが重要な課題となっている、と考えられた。従来発達過程は、肯定的側面を利用しながら直線的に相互独立的な自立を目指す、という考え方がその主流であったと思う。女性の自己形成が複雑と指摘されるのは、この従来発達過程とは異なる発達過程を歩むため、ということがその一因となっていると考えられた。

ところで、「相互独立的」な自己形成や「相互協調的」な自己形成とは、歴史的・地理的・社会的条件や宗教観などから成立した自己理解の方法である。善し悪しの問題ではない。また、“文化的に作られた発達段階”と比喻される青年期である。人類にとって普遍的な発達段階ではない。いかようにも変化する。まして、急激に変化する社会状況の中ではなおさらである。研究しつくされたテーマでも、青年期では時代により、変化することは十分に想定される。固定していないのだから、常に繰り返し、問い直していかなければならないと思う。

推論は推論として、大きな課題として残されたのは、青年期後期群・成人期前期群ともに重相関係数が有意水準に達しなかった「親への依存」因子に関わる問題である。性格特性を説明変数として行った本研究では、結果として有意な因果関係は見られなかった。青年期後期群では、「反抗期心理」因子においても重相関係数は有意水準に達していない。

「依存と反抗」の葛藤が精神発達上重要であることは周知のとおりである。論文中にも指摘しているが、依存性については不明な点が多く残る。ただ、「相互協調的な対人関係」とは、本来“健全”な依存関係に基づく対人関係と考えている。“依存性”をすべて“不健全”と断定してしまう「西欧的な公式」には疑問を持つ。病的な依存性は論外であるが、“健全な依存性”についても様々な観点から今後とも検討していきたいと思う。

< 引用文献 >

Epstein, S. 1973 The self-concept revisited, or a theory of a theory. *American Psychologist*, 28, 404-416.

石谷真一 1994 男子大学生における同一性形成と対人関係性 教育心理学研究, 42,

118-128.

- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係. 教育心理学研究, **28**, 4, 336-340.
- 桑原知子 1990 青年期の女性の自己同一性. 氏原寛・東山弘子・岡田康伸(共編)現代青年心理学 - 男の立場と女の状況 -. 培風館. Pp.55-74.
- 三枚奈穂 1998 成人女性における自我同一性の感覚について - 相互協調的・相互独立的自己感との関連から -. 教育心理学研究, **46**, 229-239.
- 三田英二 2001 青年期から成人期にかけての Self-Esteem の発達の变化に関する一研究 - 女子を被験者として、YG 性格検査からの検討 -. 日本心理学会, 第 65 回大会発表論文集, 952.
- 三田英二 2003 独立意識からみた女性の自己の発達. 青年心理学研究, **15**, 1-15.
- 三田英二 2004a 性格特性と女性の独立意識の関係(1) - 青年期と成人期前期との比較 -. 日本パーソナリティ心理学会, 第 13 回大会発表論文集, 154-155.
- 三田英二 2004b 「独立意識からみた女性の自己の発達」へのコメントに対するリプライ. 青年心理学研究, **16**, 46-51.
- 三田英二 2005a 性格特性からみた女性の独立意識. 静岡県立大学短期大学部研究紀要, **18**, 245-250.
- 三田英二 2005b 青年期における女性の自己形成. 静岡県立大学短期大学部研究紀要 (web 版), **18-w**, 10, 1-75.
- 高橋恵子・柏木恵子 1995 発達心理学とフェミニズム. 柏木恵子・高橋恵子(編著)発達心理学とフェミニズム. ミネルヴァ書房. Pp.1-16.
- Tesser, A. (1984) Self-evaluation maintenance model process: Implications for relationships and for development. In J.C. Masters & K. Yarkin-Levin (Eds), *Boundary areas in social and developmental psychology*. Academic Press. Pp.271-299
- 渡邊恵子 1995 自立再考. 柏木恵子・高橋恵子(編著)発達心理学とフェミニズム. ミネルヴァ書房. Pp.77-101.
- 山本里花 1988 女子学生の自我同一性に関する研究 - 自我の二指向性の観点から -. 教育心理学研究, **36**, 238-248.

< 脚注 >

1・・・Rosenberg Self-Esteem 尺度を因子分析し「自己矮小感」・「自負心」・「自己肯定感」の3因子が抽出されている。成人期前期群では、「自負心」は他の2因子と比べても、YG 性格検査の下位因子との有意な相関がほとんどなかった。

(2006年3月22日 受理)